

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年七月一日発行(毎月一回一日発行)
第二十卷三号(通卷第二三一号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第231号

7. 2013

毛脛

品川 鈴子

山独活に毛脛久々思ほゆる

万葉の桃昭美に下照る喜寿をとめ

えごの花禁煙パイプ啞へ詰め

花の城天女が刷きしべール雲



空襲に焦げし城塁蔦若葉

勾玉の宝塚とや花集ひ

富士山を豪雨に消され男梅雨

框にて額打つ庵梅雨湿り

俳席の所作は口伝で梅雨庵

病葉や陰樹嫌ひの祖父の松



玉鈴

吟

兵庫 史 あかり

冴返る二者扱一を迫られて
初燕見し日はかどる厨事
どら焼を三笠と言うて奈良の春
窓ガラス磨き上げても花曇
永らへること恥なるや啄木忌

兵庫 古井公代

どの店も濃き草餅の吉野山
花盛り喜寿更新のパスポート
帰るバス捜してまどふ花の山
前列は変らぬ双子入学式
石柱ぼしらのみの史跡に花ふぶき

大阪 古林田鶴子

幼らも早や社会へと花の門
ポストまで遠廻りする花のみち
夜嵐に若木は花を保ちをり
目覚めれば辛夷が窓を明かるうし
花ぐもり今日の一と日も事もなく

香川 細川知子

自転車に太ももあらは新社員
花待たずをさなともだち星の世へ
花疲れマリオネットの糸ゆるむ
満開は兄の命日さくらの夜
花筵をとこ四人の女々しくて

兵庫 細野恵久

俎板にかんぱち反りて落ち着かず
かんぱちに刃渡り足らぬまま捌く
かんぱちの片身ずしりと餅のごと
ばら色に盛るかんぱちのカルパッチョ
大鍋のかんぱちの粗まだ残る

愛媛 松井洋子

はしやぎぬし仔犬鎮もる大囃
まずガソリン満タンにして花巡り
真似事の身辺整理花の雨
赤門裏積る落花のやはらかし
夕闇に桜葉降る音聞こゆ

埼玉 松本清川

春泥の中に仮設のトイレ建ち
孫三人みな女の子桃の花
夭折の妹まだ十四桜散る
孫娘帰宅時刻の春の雷
青畳の匂ふ稽古場花盛り

兵庫 松村 晋

花の雲近づき離る観覧車
ささへられ枝垂桜を見る媼
つなよしがれし小舟に寄せる花筏
宜し寸川降りて水飲む孕鹿
ふるさとの木造校舎山桜

東京 松本アイ

凍る地に光と破壊の隕石孔
啓蟄や挨拶だけで名も告げず
生で聞くタンゴのリズム春隣
立ち位置を説きし君逝く桃の花
春の雪乱舞の果てに消えにけり

愛媛 松本恒子

誘はれて久しき一献花の下
蛭烏賊吉田類似の人と酌み
アドレス帳又ひとり消ゆ花の冷
気炎上ぐ医師の卵ら花筵
フリージアの片向く癖を剪られけり

愛媛 三浦澄江

卒業式三人だけの歌ひびく
みどり児の桃色あくび雛ひなの夜
白木蓮花嫁の耳朶透き通る
春霞墓標の如くビル並ぶ
花冷えやパン屋となりし無人駅

兵庫 三枝邦光

春光の南三陸哀の波
群れ魚を透かす内海春景色
清流のしづきに傾き雪柳
参道のほまち商ひ桜餅
教場に蜂の一匹ひと騒ぎ

兵庫 水野 範子

風光る内定通知神棚に
金盞花切るに切られぬ長さかな
人待つを忘れて花に埋もれぬる
花貝母探しあぐねて丹波まで
あたたかしりハビリルームマリア像

兵庫 水野 弘

八十路越え友笑顔満つ楠若葉
入学児背丈を隠すランドセル
頭怪我名医診断春日和
駅長の達筆花の掲示板
番鳥追い駆けっこや春の朝

香川 三橋 早苗

とら猫の屋根で伸びきる春の雲
娘には菜飯のレシピ伝へおく
春泥を掘り新病棟基礎工事
退院す今年の春をいとほしむ
小舟乗り二人漕ぎ出す春の潮

茨城 三輪 慶子

石棺の曝されてをりよなくもり
終末は神様まかせ春の雲
春嵐電車は徐行してばかり
雲速し梢に残る花の色
乗込鮎大長靴の男行く

埼玉 向江 醇子

古への人も触れなん老桜
朝寝して昼ともつかぬ飯を食ぶ
黄砂降る少くなりし畳の間
皺の手も艶のある手も桜餅
三月は皆手を振りて別れ行く

兵庫 村田 とくみ

みごもりて早母の顔春を待つ
雛の酒耳まで真つ赤下戸の兄
床屋出て春風そそと耳たぶに
ギター背にけろつと外^{そとで}出落弟子
一度きり父の手料理ぼたん鍋

大阪 師岡 洋子

湯上がりの柔はき爪切る春燈下
耕せし土の匂ひの蓮如道
飴細工ひねる手付もうらけし
潮風の通ふ道なり豆の花
霾ぐもり嘴太鴉黙り込む

東京 安田 とし子

遺言書に二文字の加筆あたたかし
混み合へる字画疎ましき花の雲
負ひし子のすでに凜々しき初出社
愈りを齢に託つ花の冷
山躑躅映えてひとりの祝婚日

埼玉 梁瀬 照恵

ローム層の表上巻揚げ春疾風
啓蟄の陽が差して透く孵卵箱
春休みの子等待つ遊具原色に
窓枠に冬麗の富士納まりぬ
生垣にモッコウ薔薇の新世帯

香川 横内 かよこ

ふらここに大人の脚は所在無く
ベビーカーおととに譲る四月かな
若芝や足裏に捉ふ生ありて
花見上ぐ皆口元の綻びて
黄砂来て臨海公園人まばら

大阪 吉田 和子

着ぶくれて怪獣リュックの女の子
春寒し夫弾くピアノ破調なる
石段にヒールのきしみ寒戻る
春の宵シャンソン聴きつ長湯して
文旦の苦味残してジャム作る

大阪 吉田 光子

西陣の飴屋賑わす花見客
寺は春庭師の手先き余念なく
花ちらし雨に舗道の小紋柄
静もりて落花さかんの浦の村
春嵐年度始めの朝の駅

愛媛 足利 鋤子

入院の手間どる事や花三分
春宵に溢れる涙とめどなく
針で指す痛みに目覚め忘れ霜
電線に丸まる小鳩吾が姿
四階の窓一面に花霞み

兵庫 荒木 治代

あたたかや赤子の仕種見て飽かず
ほどほどに生きて桜の国が好き
花見上ぐどの目差もやはらかし
取りこぼすポップコーンや花満開
工事場のテント揺さぶる春嵐

兵庫 荒木 稔

手放せし伝来の畑陽炎える
耕しの村眺むるや父の墓
笑みと云ふ無言の会釈梅の主
旧男爵の茶道具展や花あしび
衰へし目にも眩ゆき雪柳

大阪 居内 真澄

手を曳けば地団駄踏みし兒就職す
一夜にて開花奪ひて春疾風
咲くまでが眩しき蕾紫木蓮
花菜畑妣の色なる三尺帯
桜観の句を得ず座しても立ちゐても

大阪 池田 かよ

雛飾る江戸縮緬の尉と姥
三代の推移はなやぎ雛調度
がら空きの優先座席春浅し
鈍行の抜かれ抜かれて春うらら
風光る手櫛に直す乱れ髪

兵庫 池田 久恵

紙芝居よその子膝に花日和
糸通す道具廻して春休み
ごつごつの手にのせ木の芽ポンと打つ
山吹きの一重が揺れて鯉動く
紫に桜幽玄夜明け前

鈴の奏

品川鈴子選

庭先に末黒野よりの灰舞へり 大分 堤 節子

一日を占ふ山の霾ぐもり
囀を B G M に庭仕事

ゴムホース目一杯延ばし草を焼く
浜焼きの栄螺声出し飛び上がる 兵庫 太田 健嗣

この街を立ち去る決意花曇
祝電に涙腺緩む春嵐

手始めに仲居舟盛り山葵する
花の下子等はゲームに興じをり 兵庫 長瀬 節子

山桜二本切られし後の墓地
花は葉に倒れし友の目覚めなく

物置の蛍光灯に燕一羽
親も子も慣らし保育の桜かな 神奈川 八木 紀子

風まかせ一期一会の桜花
あら不思議枝垂桜の傘の中

行つてきます新一年生声あげて
父の忌に花立溢る春の雨 兵庫 内藤 京子

裏道も閑かに爛ける桜どき

四寸の毘沙門天像春埃
下駄音は悔過の響きか花会式 大阪 三井 尚美

山笑ふ雨後の生駒は近々と
独り居に雨の聞こゆる春の宵

大学の入部勧誘風光る
雨の日は朝寝と紅茶ほつこりと

鉄線花とある市長の若白髪 大阪 宮村フトミ

気は急けど体は鈍る梅雨晴れ間
桜餅まだかもうかと七十路を

鼻上げし象に止めどもなき落花
駅前の石牛春の雲見上げ 兵庫 岡田満喜子

連絡船縫う島々は竹の秋
甲州路畑にも家にも梅の花

医に不信抱き友逝く花冷えに
手伝ひてもらふ春菜の歯切れよさ 兵庫 中村 吟子

車中にて叫んでしまふ花万朶
豆腐屋のラッパ遠のく春かすみ
息子来て母の手となる木の芽和

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 木原 今女 //

* 選句は全て 品川鈴子

庭先に末黒野よりの灰舞へり

堤 節子

物置の蛍光灯に燕一羽

長瀬 節子

小柄で物静かな作者は「天狼」俳句を学ぶ若手として、長い俳歴を重ねながら、結婚相手に従って日本の各地へ転勤した。その間忙しい主婦業だけでなく両親の介護も苦にせず引受けて永年の親孝行を尽くした。この程定年を機会にその任地九州で新居を定め、大分平野の大景に身をゆだねる句友の連作はおおらか。

浜焼きの栄螺声出し飛び上がる

太田 健嗣

親も子も慣らし保育の桜かな

八木 紀子

栄螺は日本近海に多く、海藻を食べる巻貝。貝殻や蓋は厚い石灰質で渦巻模様と真珠光沢が美しくボタンや細工物になる。旬は春なので出雲の浜で壺焼きにするとさぞおもしろいだろう。だが直火で活き身を焼かれる貝は地獄の責めに悶える。残酷な人間と貝の泣く声。

滅多に開けぬ物置へ来て蛍光灯を点けてみると、傘に縋って一羽だけのはぐれ燕が見つかった、この前誰かがちよつと開けた隙に燕の早技で紛れ込んだのに違いない。分秒で別れる運不運は宿命的とおもう、解放された燕の恩返しに、この一句が授かった作者。

四月に保育園へ入園したお子さんは最初は一日二、三時間だけの保育でもすぐに保育士さんに笑顔を見せ好きな玩具を見付けるもの。肝心なのはお母さん、後髪を引かれる思いで家事が手につかないのではないだろうか。そんな不安な気持ちを通園途中にあるか園庭にある桜に慰められておられる。

父の忌に花立溢る春の雨

内藤 京子

連絡船縫う島々は竹の秋

岡田満喜子

お墓を綺麗に掃除されて花立てに花も挿し線香も熏きお参りをすませたが降り止まぬ雨は満水にした花立てから伝って溢れている。父上を偲ぶには恰好の雨かと思えます。

雨の日は朝寝と紅茶ほっこりと

三井 尚美

春は天気が変わりやすいので雨の日も多い。たまたま前句も雨の句となりましたが作者も暖かい寝床の中で雨の気配を感じ、いつもより遅い目に起き出して好きな香りの紅茶を淹れて一日が始まる。その贅沢な時間をかみしめておられる。ほっこりとが紅茶の暖かさとの温もりを言い得ている。

鼻上げし象に止めどもなき落花

宮村フトミ

どの動物園も花形はやつぱり象さん。大人も子供もその前では足を止めて動きを見詰める。鳴き声など聞けたら儲け物。ちょうど桜も満開で折柄の嵐に落花盛ん。振り上げた鼻先近くにまで桜の枝先が伸びているのかも。

近年はこの山も竹林が増えて山の環境を壊しているようですが、春のおだやかな潮にのつて島々に生う木々が見分けられるほどの近さを航行しておられるでしょう。伊予に生まれ育つたものには瀬戸内の島々を連想します。

息子来て母の手となる木の芽和

中村 吟子

久しぶりにお見えになった息子さんに手作りの料理を揃えようと木の芽を摘んで挿鉢であたろうとすると、さつと動かぬように手を添えてくれる。その香りは食欲をそそるものでしょう。筍や貝、鳥賊などに緑の和えごろもが何とも美味であります。

無精髭剃ればイケメン合格子

吉田 耕人

春の入試に向けて昼も夜も勉強を頑張っておられて身だしなみは二の次だったのを、めでたく合格され綺麗さつぱりと男前になって祖父様に会いにこられた。一段の成長にお喜びになっておられるのは本当におめでとございます。